宿木巻における中の君

――宇治行き嘆願の理由をめぐって

蕗谷雄輝

一　はじめに

大君が亡くなった翌年の春、中の君は宇治を離れ、匂宮の邸宅である二条院に迎え入れられる。上京前から匂宮との結婚生活に不安を抱いていた中の君だが、夕霧の娘六の君と匂宮の婚約を知るにつけて、いよいよ宇治を離れたことを後悔すると同時に、宇治帰郷の願望を抱くようになっていく。

中の君の宇治帰郷への思いは、中の君の心内で完結するわけではない。中の君は二つの場面で、薫に宇治行きを訴える。一度目は、薫が朝顔の花を持って二条院を訪れたとき。二度目は、中の君自ら手紙を出して薫を二条院に招いたとき。その訴えはいずれも薫に承諾されることなく終わる。

それにしてもなぜ中の君は、薫に宇治行きの願いを訴えかけるのだろうか。単純に解するならば、中の君は薫の助けを得ることで宇治行きを果たそうとしているのだと読みたくなる。だが、実際はそうではないのではないだろうか。

中の君が宇治行きを訴える場面には、口実を設けるという意味を持つ言葉、「ことつく」が用いられる。以前、宇治十帖で「ことつく」と表現される口実は、ことごとく目的を実現させずに終わることについて論じた際にも、この場面について検討した。[1] そこでは深く言及するにいたらなかったが、このとき中の君は、宇治帰郷という目的が実現するのは到底困難であることを自覚していたのではないだろうか。そのうえで中の君は、八の宮の法事を口実として振りかざしながら薫に宇治行きを訴えるのである。そのように考えるならば、中の君が宇治帰郷を薫に訴える理由を、宇治行きを果たしたいからだと処理するのは早計であるといえよう。そこで本稿では、中の君が薫に宇治行きを訴えた本当の理由について検討していき、宿木巻における中の君の意識について明らかにしていきたい。

二　中の君の宇治帰郷願望

中の君が二条院に移って以降、宇治帰郷について最初に記述が

あるのは、次に挙げる中の君自身の心内語においてである。

Aなほいとうき身なめれば、つひには山住みに還るべきなめり、と思すにも、やがて跡絶えなましよりは、山がつの待ち思はんも人笑へなりかし。かへすがへすも、宮ののたまひおきしことに違ひて草のもとを離れにける心軽さを、恥づかしくもつらくも思ひ知りたまふ。（宿木⑤三八三～三八四頁）

匂宮と六の君の婚約を聞いて、自らの情けない身の上を思い知った中の君は、結局は宇治での生活に戻らねばならないことになろうと思い、つくづく宇治を離れたことを後悔する。

中の君がはじめて宇治帰郷願望を実際の発話をもって語るのは、二条院に薫が訪れてきた次の場面である。

B「世のうきよりはなど、人は言ひしをも、さやうに思ひくらぶる心もことになくて年ごろは過ぐしはべりしを、今なん、なほいかで静かなるさまにても過ぐさまほしく思うたまふるを、さすがに心にもかなはざめれば、弁の尼こそうらやましくはべれ。この二十日あまりのほどは、かの近き寺の鐘の声も聞きわたさまほしくおぼえはべるを、忍びて渡させたまひてんやと聞こえさせばやとなん思ひはべりつる」（宿木⑤三九七～三九八頁）

中の君は、「世のうきよりは」で「山里はもののわびしきことここそあれ世の憂きよりは住みよかりけり」（『古今集』雑下　九四四　詠み人知らず）の歌を引きつつ、都に住む今となって、宇治の山里で静かに暮らしたいという思いを抱いていることを訴えかける。さらに、八の宮の供養のために、自分をそっと宇治に連れて行ってほしいと願う。

この願いを薫は退けるのだが、中の君は宇治行きを薫に訴えることをやめない。

C経仏など、この上も供養じたまふべきなめり。かやうなるついでにことつけて、やをら籠りゐなばやなどおもむけたまへる気色なれば、「いとあるまじきことなり。なほ何ごとも心のどかに思しなせ」と教へきこえたまふ。（宿木⑤三九八～三九九頁）

中の君は、薫が八の宮の法事の手はずについてあれこれと報告すると、その法事を口実にして宇治にそっと籠もりたいという様子を薫に見せる。薫は「いとあるまじきこと」として、やはり中の君の訴えを棄却する。こうして中の君の宇治行きの訴えは、聞き入れられずに終わる。

だが、中の君の宇治帰郷願望はここでは終わらない。次に挙げるのは、匂宮と六の君の婚儀当日の夜、六条院から迎えが来たことを受けて、匂宮が二条院を立ち去った後、中の君が月を眺めながら独詠する場面である。

D松風の吹き来る音も、荒ましかりし山おろしに思ひくらぶれば、いとのどかになつかしくめやすき御住まひなれど、今宵はさもおぼえず、椎の葉の音には劣りて思ほゆ。

山里の松のかげにもかくばかり身にしむ秋の風はなかりき

来し方忘れにけるにやあらむ。（宿木⑤四〇四頁）

中の君は、松風の吹く音を聞くにつけても、かつて宇治で聞いた椎の葉ずれの音に劣っているように感じ、「宇治に住んでいた頃でも、これほどまでに身にしみるような悲しい秋風が吹くことは

なかった」という意味の歌を詠む。宇治で感じていた秋風よりもいま都で感じる秋風の方が辛いものだと感じる中の君であるが、その感覚が極めて主観的なものであることを「荒ましかりし山おろしに思ひくらぶれば、いとのどかになつかしくめやすき御住まひなれど」「来し方忘れにけるにやあらむ」といった言葉によって語り手は暴く。[2] 本来穏やかであるはずの秋風ですら悲痛に感じるほどに、中の君は都での生活に苦痛を感じており、一層宇治帰郷への憧憬を募らせるのである。

中の君による宇治憧憬の独詠歌は、もう一首ある。六の君との婚儀の二日目、匂宮が六の君のもとに行く準備をする様子を見て一層辛く思う中の君は、再び宇治を恋しく思い、歌を詠む。

E 蜩の鳴く声に、山の陰のみ恋しくて、
おほかたに聞かましものをひぐらしの声うらめしき秋の暮かな
（宿木⑤四一三頁）

「あのまま宇治に残っていたならば、蜩の声も一通りの寂しさで聞いていただろうに、都にいるばかりに、恨めしい気持ちで蜩の声を聞くこととなってしまった秋の暮れであるよ」と、またしても中の君は都で聞く自然の音から宇治を懐旧する歌を詠むのである。

宇治懐旧の思いは独詠するに留めていた中の君であったが、匂宮が六の君のもとに頻繁に通うようになり、夜離れが続くようになると、再び薫に宇治行きを訴えることになる。

F かへすがへすも、山路分け出でけんほど、現ともおぼえず悔しく悲しければ、なほ、いかで忍びて渡りなむ、むげに背くさまにはあらずとも、しばし心をも慰めばや、憎げにもてなしなどせばこそ、うたてもあらめ、など心ひとつに思ひあまりて、恥づかしけれど、中納言殿に文奉れたまふ。
（宿木⑤四二一頁）

宇治を離れたことを激しく後悔した中の君は、「やはり、どうにかして宇治にこっそり行ってしまおう」と思い、薫に手紙を送る。手紙の内容は、表面上、八の宮の法事の手続きをしてくれた感謝を直接伝えたいといったものであった。その手紙を受けて、薫は匂宮不在の二条院を訪れる。薫は匂宮の不実を責めたり、中の君を慰めたりしながら静かに会話をする。そうしたなか、中の君は再び薫に宇治行きを打診する。

G 女君は、人の御恨めしさなどは、うち出で語らひきこえたまふべきことにもあらねば、ただ、世やはうきなどやうに思はせて、言少なに紛らはしつつ、山里にあからさまに渡したまへと思しく、いとねむごろに思ひてのたまふ。
（宿木⑤四二五頁）

この後、なかなか帰ろうとしない薫に対して煩わしく思った中の君は、奥に引き下がろうとするが、薫は引き止めるようにして、宇治行きはいつがいいかと中の君に尋ねる。

H「さても、いつばかり思したつべきにか。いと茂くはべし道の草も、すこしうち払はせはべらんかし」と心とりに聞こえたまへば、しばし入りさして、「この月は過ぎぬめれば、朔日のほどにも、とこそは思ひはべれ。ただ、いと忍びてこそよからめ。何か、世のゆるしなどことごとしく」とのたまふ声の、いみじくらうたげなるかなと、常よりも昔思ひ出でらるるに、えつつみあへで、寄りゐたまへる柱のもとの簾の下

より、やをらおよびて御袖をとらへつ。

（宿木⑤四二六～四二七頁）

中の君は、薫の問いかけに対して、来月の初めごろがよい旨と、くれぐれも内密に連れて行ってほしい旨を訴える。このときの中の君の声を聞いて、薫はいよいよ恋情を抑えきれず中の君の袖を掴む。中の君は思いがけない薫の行動にすっかり失望し、結局これ以降宇治行きを訴えることはなくなる。

いま見てきたように、中の君の宇治帰郷願望は、ことあるごとに描出されていた。中の君の宇治帰郷願望は、匂宮と六の君の関係が深まることで強まっていくのであった。宇治帰郷は、中の君が心の底からの切実な願いであることが、所々の中の君の悲痛な心内語や独詠歌から読み取れる。こうしたなか、中の君は薫に宇治に連れて行ってほしいと訴える。なぜ中の君は薫に宇治行きを嘆願するのか。単純に考えるならば、中の君にとって薫が唯一、この願いを果たしてくれる可能性をもった存在であり、薫に訴えることによって宇治行きを実現させようとしているからだということになるだろう。だが、冒頭でも述べたように中の君が薫に宇治行きを切望するのは、なんとしてでも宇治行きを実現させたいからではないと考えられるのである。そのように考える要因は、次の二つである。一つは、宇治帰郷が薫をもってしても極めて実現困難な願いであること。もう一つは、中の君がわざわざ口実を設けながら宇治行きを訴えかけていること。これらのことに留意しつつ、中の君が薫に宇治行きを訴える本当の理由を解き明かしていきたい。

三　実現困難な宇治帰郷

はじめに、宇治帰郷願望が実現困難であることについて確認していく。それを考えるにあたって、薫がなぜ中の君の訴えを退けたのかを見ていきたい。まずは、初めて宇治行きを訴えた本文Bに対する薫の返答を挙げる。

「荒らさじと思すとも、いかでかは。心やすき男だに、往き来のほど、荒ましき山道にはべれば、思ひつつなん月日も隔たりはべる。故宮の御忌日は、かの阿闍梨にさるべきことどもみな言ひおきはべりにき。かしこは、なほ、尊き方に思し譲りてよ。時々見たまふるにつけては、心まどひの絶えせぬもあいなきに、罪失うさまになしてばやとなん思ひたまふるを、またいかが思しおきつらん。ともかくも定めさせたまはんに従ひてこそはとてなん。あるべからむやうにのたまはせよかし。何ごとも疎からずうけたまはらんのみこそ、本意のかなふにてははべらめ」

（宿木⑤三九八頁）

薫は、宇治への往来が険しいこと、八の宮の法要については宇治山の阿闍梨にすべて頼んであることを並び立てて、中の君の願いをやんわりと退ける。また、宇治の邸を寺に寄進してはどうかという提案をする。さりげなく話題を転換することで、薫は宇治帰郷の訴えをうやむやにする。すでに前節で確認したように、この後も中の君は宇治行きを願うが、薫はそれも「いとあるまじきこと」として退けるのであった。

ここにおいて、中の君の願いを薫が退ける決定的な理由は、はっ

きりと示されていない。それが示されるのは、本文Gで、「山里にあからさまに渡したまへ」という思いを訴えかけた中の君に対する薫の発言である。

「それはしも、心ひとつにまかせては、え仕うまつるまじきことにはべなり。なほ、宮に、ただ心うつくしく聞こえさせたまひて、かの御気色に従ひてなんよくはべるべき。さらずは、すこしも違ひ目ありて、心軽くもなど思しものせんに、いとあしくはべりなん。さだにあるまじくは、道のほども御送り迎へも、下り立ちて仕うまつらんに、何の憚りかははべらむ。うしろやすく人に似ぬ心のほどは、宮もみな知らせたまへり」

（宿木⑤四二五～四二六頁）

薫は、自分の一存では宇治行きを実現させることはできないこと、あらぬ誤解を受けないために匂宮に意向をうかがうべきだということ、匂宮の許可さえ下れば、自分は喜んで道中の送り迎えを引き受けることなどを、理路整然と並び立てる。この発言から薫が中の君の宇治行きを断念させる決定的な理由が明らかになる。要するに、中の君を宇治に連れていけないのは、中の君の夫である匂宮から疑いの眼差しを向けられたくないからなのである。宇治帰郷の件に限らず、薫は自分と中の君との仲を匂宮から疑われないよう、周到に立ち回る。

宮の、などか、なきをりには来つらんと思ひたまひぬべき御心なるもわづらはしくて、侍所の別当なる右京大夫召して、「昨夜まかでさせたまひぬとうけたまはりて参りつるを、まだしかりければ口惜しきを。内裏にや参るべき」とのたまへば、「今日は、まかでさせたまひなん」と申せば、「さらば、夕つ方も」とて出でたまひぬ。

（宿木⑤三九九頁）

本文B・Cの場面におけるやり取りの後で、二条院を立ち去る際、薫は匂宮からなぜ自分が不在のときに訪れたのかと疑われることが面倒なので、わざわざ侍所の別当を呼んで、匂宮に用があったことを言い残す。そうすることで、不在を狙って中の君を訪れたと匂宮から捉えられないように手回しをするのである。ここから薫が、いかに匂宮の疑いの目を回避しようとしているかがよくうかがえる。

さて、もし薫が中の君の訴えを素直に受け入れて匂宮の目を盗み、中の君を宇治へ連れ出したらどうなるだろうか。仮にほんのわずかな期間だったとしても、匂宮から一切気づかれずに宇治行きを果たすことは極めて困難であろう。匂宮がその間、二条院に帰邸しなかったとしても、二条院に仕える女房から、中の君が連れ出された旨を伝え聞く可能性は充分にある。そうなれば、薫は匂宮から中の君を略奪したと捉えられることは必至である。正妻ではないとはいえ、都随一の貴公子である匂宮からその妻を奪ったとあれば、大事件として取り沙汰されることであろう。そのような事態はなんとしても起こすわけにはいかない。こうした理由から、薫は中の君の宇治行きを承諾しない。

こうした事態が起こった場合、不都合に思うのは、薫に限った話ではない。薫に略奪されたと取り沙汰されて苦痛を強いられるのは中の君本人である。

宇治帰郷について初めて言及される本文Aでは、「やがて跡絶えなましよりは、山がつの待ち思はんも人笑へなりかし」という中の君の心中が綴られていた。中の君は、宇治に帰りたい気持ち

を抱く一方で、もし宇治に戻ったならば、自分は宇治の人々の「人笑へ」、すなわち笑いの種になるに違いないと思うのである。中の君は、都の「人笑へ」となることだけでなく、宇治で取り沙汰されることも恐れている。もし薫が本当に自分を宇治に連れて行ったならば、都のみならず宇治でも面白おかしく取り沙汰されることは中の君にも容易に想像できたことであろう。そのように考えるならば、薫にこっそり宇治に連れて行ってもらうことが叶ってしまっては困る願いなのは、中の君自身、重々承知していたことであったはずである。

そのことは、初めて薫に宇治行きを訴えかけたときの言葉からもわかる。本文Bにて、中の君は薫に向かって「さすがに心にもかなはざめれば、弁の尼こそうらやましくはべれ」と言っていた。中の君は宇治での静かな暮らしを望むものの、その望みは叶わないようであるから、宇治に留まる弁の尼が羨ましいということを述べている。中の君は匂宮の妻となったいま、静かに宇治で暮らすことが不可能であることを重々承知している。だからこそ、自分と違って、尼の身となり、宇治滞在を果たしている弁の尼に対して、羨望の念を向けるのである。そのうえで中の君は、薫に宇治行きを訴えかけているのである。もしこの場で薫が中の君の訴えを愚直に快諾し、すぐにでも連れ出そうものならば、中の君は喜ぶどころか、大いに困惑したことだろう。

さらにいえば、薫はまだ知らないが、宇治行きを嘆願するとき中の君はすでに妊娠している。葵祭の見物に行った葵の上の例もあるように、妊娠しているからといって外出が全くできないということはない。だが、都から宇治の道のりが「遥けくはげしき山道のありさま」（早蕨⑤三六三頁）であることを中の君は身をもって知っている。身重の状態で宇治に行くことが容易ではないことは、中の君自身わかっていたはずである。そうした意味でも、中の君の宇治行きは、決して現実的な願いとはいえない。

もちろんなんの制約もなく宇治帰郷が果たせるのであれば、それに越したことはないだろう。だが、実際には宇治行きを実行しようとするならば、相当の困難が伴う。そこから鑑みると、中の君にとっての宇治行きは、なんとしても実現させたい願いだったというよりもむしろ、実現せずとも思い描くだけで心が慰められるような夢物語でしかなかったのだと考えられる[3]。

四　苦悩を隠す中の君

次に、わざわざ口実を設けて薫に宇治行きを訴えていることについて考えたい。中の君が口実を設けて宇治行きを訴えていることが最も顕著なのは、本文Cにおいてである。中の君は、宇治に籠もりたいという様子を見せる際、「かやうなるついでにことつけて」と、八の宮の法事を口実にしている。宇治行きを切望するのは、匂宮との結婚生活があまりにも耐え難く辛いためであるが、中の君は決してその理由を口にしない。その代わり、八の宮の法事を口実にして薫に宇治行きを迫るのである。

八の宮の法事を口実にするとき、「ことつく」という言葉が用いられている。「ことつく」という言葉は、作中人物が口実を設けるという行為に及んだことを読者に対して殊更に暴き立てるときに使われる[4]。ここでも、中の君が提示した八の宮の法事という

理由が、あくまで口実でしかなく、その裏に本当の理由――匂宮との結婚生活による苦痛――が潜んでいることに、読者の関心を向かわせているのである。

宇治行きを訴える他の場面を見てみても、中の君は決して本当の理由を薫には明かさない。本文Bにおける中の君の発話では、「この二十日あまりのほどは、かの近き寺の鐘の声も聞きわたさまほしくおぼえはべるを」とあり、やはり八の宮の法事を口実にして宇治行きを訴える。本文Gでは、「人の御恨めしさなどは、うち出で語らひきこえたまふべきことにもあらねば」とあるように、匂宮に対する恨みごとは決して語るまいとして、「世やはうきなどやうに思はせて[5]」と、自分の身のつたなさにかこつけて宇治行きを訴えている。

なぜ中の君は本当の理由を明かさずに、口実を設けながら宇治行きを訴えるのか。達成しがたい目的をなんとかして達成するために受け入れやすい口実を設けることは、『源氏物語』でも多く見受けられるが[6]、この場合はそうではない。すでに述べたように、中の君の宇治行きはなんとしても達成しようとする性質のものではないからである。中の君の場合は、本当の理由をはっきり口外しないように、別の理由を持ち出しているのだと考えられる。

中の君は、薫に限らず、誰に対しても匂宮との結婚生活の不安や苦痛を吐露することはしない。とりわけ、匂宮に対して自分の苦悩を決して見せまいとする中の君の態度は、たびたび描かれていた。

何かは、かひなきものから、かかる気色をも見えたてまつらんと忍びかへして、聞きも入れぬさまにて過ぐしたまふ。

（宿木⑤三八四頁）

女君は、日ごろもよろづに思ふこと多かれど、いかで気色に出ださじと念じ返しつつ、つれなくさましたまふことなれば、ことに聞きもとどめぬさまに、おほどかにもてなしておはする気色いとあはれなり。

（宿木⑤四〇二頁）

今は、いかにもいかにもかけて言はざらなむ、ただにこそ見めと思さるるは、人には言はせじ、我ひとり恨みきこえんとにやあらむ。

（宿木⑤四〇五頁）

こうした態度からは匂宮への恨みごとや結婚生活への不安を誰にも見せまいとする中の君の意志が確認できる。薫に宇治行きを訴える際に口実を設けるのも、この意志が大きく関わっている。都での結婚生活が不安だから宇治に連れて行ってほしいとあからさまに言えば、匂宮への不満を吐露したことになってしまう。そうならないように中の君は、わざわざ八の宮の法事などにかこつけながら、薫に宇治行きを訴えるのである。中の君が遠回しに宇治行きを訴える背景には、匂宮への不満を決して口に出すまいとする中の君の意志があったのである。

ここで疑問が残る。前節で確認したように、どんなに願っても宇治行きが果たせないことは中の君自身よくわかっていたはずである。それにもかかわらず、中の君は薫に宇治行きを願う。果たされないと分かっているのに、なぜ宇治行きを嘆願するのか。匂宮への不満を口外したくないのなら、そもそも宇治行きの話などしなければ、口実を設けずに済んだのではないだろうか。こうし

た疑問を糸口にすると、中の君が薫に宇治行きを訴えた本当の理由が見えてきそうである。

五　中の君の孤独

前節で、中の君が自らの苦悩を、匂宮をはじめとして周囲の人々に見せまいとすることを確認した。こうした中の君の態度は、「厳しい現実の体験をとおして、みずからのあるべき生を賢明に編み出していく叡智[7]」や「幸福と平安を求める女性の賢明な現実対処[8]」といった評価がなされてきた。苦悩を見せずにふるまう中の君に、都のなかで賢明に現実に対処する姿を見出す点においては首肯すべき論であるといえるが、一方でその裏にある中の君の心の有り様を無視するわけにはいかない。斉藤昭子は、中の君に用いられる「さま」「もてなし」という語に着目し、これらの語が「この人物の本性と、人の視線を意識しふるまう態度の二重化的な分離を示すもの[9]」であると述べる。また井野葉子は、「彼女の聡明な処世術の根底には、押し殺しても殺しきれない心の叫びが秘められている[10]」と述べる。苦悩を誰にも打ち明けずに、賢明に現実を生きようとすればするほど、あるいは苦悩が増幅すればするほど、現実のふるまいと本心との乖離は進んでいき、やがて亀裂が生じていく。

いみじく念ずべかめれど、え忍びあへぬにや、今日は泣きたまひぬ。日ごろも、いかでかう思ひけりと見えたてまつらじと、よろづに紛らはしつるを、さまざまに思ひ集むることし多かれば、さのみもえもて隠されぬにや、こぼれそめてはとみにもえためらはぬを、いと恥づかしくわびしと思ひて、いたく背きたまへば、……

（宿木⑤四〇八頁）

六の君との初夜を迎えた翌朝、二条院に帰邸した匂宮を前にしての中の君の様子である。中の君は、途中までは「なつかしく愛敬つきたる」（宿木⑤四〇八頁）様子を匂宮に見せていたものの、ついに匂宮の前で涙を零してしまう。鈴木貴子は中の君の涙を、匂宮を自分のもとに引き止めるためのものであるとするが[11]、この場面においては、むしろ現実対処のためのふるまいをし損ねた中の君の姿を読み取るべきではないだろうか。「いみじく念ずべかめれど」「いかでかう思ひけりと見えたてまつらじ」と、中の君が懸命に苦悩を見せまいとしていることが繰り返される一方、それでもなお苦悩に堪えきれずに涙を落としてしまったことが、しつこいほどに繰り返される「え……打消」という不可能の表現によって極めて印象的に語られる。この時点においては、もはや涙を流すという身体の反応を、自らの意志だけでは制御できなくなった中の君の姿が看取されよう。中の君の苦悩は、もはや現実対処のふるまいに支障をきたすほどに、深刻さを極めている。

こうした中の君の苦悩は、せめて心を許すことができる誰かに打ち明けることができれば、幾分紛らわすこともできたであろうが、中の君の周辺には彼女の苦悩に寄り添ってくれる人間はいない。宇治で過ごしていたときからの女房も都に来てはいたが、彼女らは決して中の君の心に寄り添えるような人々とはいえない。宇治の姫君に仕える女房は、自らの生活の安定を優先するがゆえに、主人の意志を理解できない人物として造型されている[12]。宇治から都に旅立つ際にも、宇治を離れる悲しみにくれる中の君をよ

そに、上京の喜びを和歌で表現して笑みをこぼす大輔の君という女房の姿が語られていた。また、後に自らに執着する薫に中の君が困惑した際には、次のように語られていた。

さぶらふ人々もすこしものの言ふかひありぬべくわかやかなるはみなあたらし、見馴れたるとては、かの山里の古女ばらなり、思ふ心をも同じ心になつかしく言ひあはすべき人のなきままには、故姫君を思ひ出できこえたまはぬをりなし。

（宿木⑤四四三～四四四頁）

話し相手になりそうな若い女房は皆、都に来てからの新参の女房であり、彼女らは宇治での事情を知らないため、薫についての相談はできそうにもない。宇治の頃から仕える古女房はというと、同じ心をもって親身になって話し合えるような人はいないと語られる。宇治での時間を共有する女房ですら、中の君に共感してくれる者は誰一人としていないのである。女房のなかでは唯一、中の君と思いを共有できたであろう弁の尼も、いまでは出家して宇治の地に留まっているため、そばにはもういない。

父八の宮、姉大君を亡くし、都の論理に従うゆえに中の君の心を理解できない女房に囲まれた中の君にとって、自らの悩みを打ち明けて寄り添ってもらえると思える人間はいないのである。ただ一人、薫という人物を除いては。

六　宇治行き嘆願の理由

宇治でともに過ごした女房ですら共感しえない中の君の心に唯一寄り添える存在としての薫について見てみたい。薫は中の君が都に移った後も、たびたび中の君と、亡き大君を偲び、宇治での思い出に浸っていた。ここでは薫に対する中の君の認識をいくつか確認する。

尽きせず思ひほれたまひて、新しき年とも言はずいやめになむなりたまへると聞きたまひても、げに、うちつけの心浅さにはものしたまはざりけりと、いとど、今ぞ、あはれも深く思ひ知らるる。

（早蕨⑤三四七頁）

大君が亡くなってから最初の春が訪れるが、年が改まってもなお大君を失った悲しみから薫はいつまでも涙ぐんで過ごしている。その様子を聞くにつけても中の君は、大君を思う薫の誠実さに心打たれる。

次に見るのは、都に移った直後に二条院を訪問した薫が帰った後の、中の君の心内語である。

わが御心にも、あはれ深く思ひ知られにし人の御心を、今しもおろかなるべきならねば、かの人も思ひのたまふめるやうに、いにしへの御代りとなずらへきこえて、かう思ひ知りけり、と見えたてまつるふしもあらばや、……

（早蕨⑤三六九頁）

このとき中の君は、薫を「いにしへの御代り」、すなわち亡き大君の身代わりと見なして、ありがたく思う気持ちを分かってもらう機会があればよいのに、と思う。中の君は宇治での思い出を共有できる唯一の存在である薫を、亡き姉大君の身代わりと思っている。

その一方、中の君は薫に対して一定の物理的な距離をとる。薫が初めて二条院を訪れた際も、また初めて宇治行きを訴える際も、

中の君は薫を賓子までしか通さない。だが、その対応とは裏腹に、中の君は次のように薫を捉える。

もとよりけはひはやりかに男々しくなどはものしはたまぬ人柄なるを、いよいよしめやかにもてなしをさめたまへれば、今はみづから聞こえさせたまふことも、やうやう、うたてつつましかりし方すこしづつ薄らぎて面馴れたまひにたり。

（宿木⑤三九三頁）

薫に対する中の君の警戒心は、薫の慎み深い態度によってだんだんと緩和されていき、いまでは直に話すことも慣れてきたと語られる。元々薫の大君への深い愛情に一目置いていた中の君は、次第に薫に対して打ち解けていく。

さらにこの後、薫は宇治を訪れた話をしながら、宇治での思い出や大君を失った悲しみをしみじみと中の君に語りかける。そうした薫の様子を受けて、中の君はますます薫と心が通っているかのような感覚を得ていく。

昔の人をいとしも思ひきこえざらん人だに、この人の思ひたまへる気色を見んには、すずろにただにもあるまじきを、まして、我もものを心細く思ひ乱れたまふにつけては、いとど常よりも、面影に恋しく悲しく思ひきこえたまふ心なれば、いますこしもよほされて、ものもえ聞こえたまはず、ためらひかねたまへるけはひを、かたみにいとあはれと思ひかはしたまふ。

（宿木⑤三九七頁）

ここで「かたみにいとあはれと思ひかはしたまふ」と語られていることは見逃せない。この場面において、薫と中の君は、大君と宇治の思い出を互いに共有し、思いを交わし合うことができる者同士として語られるのである。この後、中の君は最初の宇治行きを薫に訴える。

中の君が二度目の宇治行きの訴えをする場面にて、二条院を訪問した薫に対する中の君の心内語は次のようなものであった。

女君も、あやしかりし夜のことなど思ひ出でたまふをりをりなきにしもあらねば、まめやかにあはれなる御心ばへの人に似ずものしたまふを見るにつけても、さてあらましをとばかりは思ひやしたまふらん。

（宿木⑤四二五頁）

中の君は、薫の実直さを見るにつけても、「さてあらましを」、もし薫と結婚していたら、という仮定をしている。匂宮の不実さが身にしみればしみるほど、薫の誠実さに惹かれるようになっていくのである。こうした薫への心情から、中の君は初めて薫を賓子ではなく廂の間に入れる。最初こそ母屋の奥の方に身を引いていた中の君であったが、「いと遠くもはべるかな」（宿木⑤四二五頁）と言う薫に、素直に応じて御簾の近くまでにじり寄る。薫に心を許すに従って、物理的な接近も厭わなくなっていることがうかがえる。この後、中の君は再び薫に宇治行きを訴えるのであった。

いま見てきた通り、都に来て以降、中の君は徐々に薫に心を許すようになっていき、特に薫との心の距離が縮まったと感じたときに、宇治行きを訴えている。このことを踏まえると、中の君が薫に宇治行きを訴えかける本当の理由がいよいよ見えてくる。中の君は、宇治行きを実現しようとして薫に願っていたのではない。自分はこの都を離れて宇治に帰り、大君が生きていた頃のように宇治で静かに暮らしたいという気持ちを、薫にわかってもらいたかったのではないだろうか。都に来て以来、他の誰とも共有でき

ない宇治への強い憧憬を薫なら理解してくれるだろうと信じたからこそ、中の君は宇治行きを訴えるのである。

さらに中の君は、自らが抱える苦悩――匂宮との結婚生活の不安――を薫に察してもらいたかったのではないだろうか。中の君は決して匂宮への不満を直接口には出さない。そうすることが都で賢明に生きるための術であるからだ。だが、薫に対してだけは、その悩みを読み取らせるだけの隙を敢えて見せたのだと考えられる。本文Cの「かやうなるついでにことつけて」という叙述が、「おもむけたまへる気色」に掛かっていることから、八の宮の法事が単なる口実に過ぎないことを中の君の様子から薫が読み取っていることが分かる。このとき中の君は、皮相的な理由を提示し、それを薫に口実だと感知させることで、その口実の裏にある本当の理由――匂宮との結婚生活への苦痛――に薫の目を向けさせようとしたのではないだろうか。

「ことつく」は、すでに述べたように、物語が読者に対して、作中人物が口実を設けたことを殊更に暴き立てるという機能を果たす言葉である。しかし、この中の君に使われる「ことつく」からは、それのみならず、口実の裏に隠された苦悩に薫の目を向けさせようとする中の君の思惑も透けて見えるのである。

さらに宇治行きについて、本文B、Hにあるようにわざわざ「忍びて」と言っているのも、隠された苦悩に薫の目を向けさせるための術であるように考えられる。匂宮との結婚生活による苦痛を完全に隠蔽するのであれば、匂宮には内密に実行したいことを強調しないのではないか。匂宮から宇治帰郷を認めてもらう展望が見えないからこそ内密にと願ったのだとも取れようが、すでに確認した通り、匂宮に内密にしたからとて宇治行き実現の可能性が高まるわけではない。むしろ匂宮の目を盗むという条件が付くことで、その難易度は格段に上がることになろう。それにもかかわらず、ここで敢えて「忍びて」というのは、匂宮との結婚生活という現実から逃避したいという思いを暗に薫に気づかせるためであると考えられる。

中の君の宇治行き願は、宇治帰郷をなんとしても果たそうとしたからではなく、ひとえに自分の宇治憧憬の気持ちを薫にわかってほしい、そして自分の苦悩を察してもらいたい、という思いによるものであった。心の拠り所であった父八の宮と姉大君を亡くし、女房たちの理解も得られない中の君にとって、薫は唯一心を許すことのできる存在であり、それゆえに薫に宇治行きを訴えるという行為を通して薫に甘えてみせたのである。本心を押し殺し、都の論理に従って賢明に生きようとする中の君にとって、こうした薫との応酬は心の安息を得られる唯一の手段であったに違いない。中の君の宇治行きはついぞ果たされることはなかったが、こうしたやり取りをすること自体が、中の君にとっては一時の心の癒やしになっていたのである。

七　中の君に恋情を抱く薫

だが、中の君の心の安息はやがて終わりを迎えることとなる。本文Hで示したように、薫は中の君への恋情を抑えきれなくなり、簾の下から手を伸ばし、中の君の袖をとらえる。薫は、中の君の想定とは裏腹に、中の君への恋情を激しく燃やしていたのであっ

た。

大君を亡くして以降、薫は次第に中の君に恋情を抱くようになる。そのことは、すでに早蕨巻にて語られていた。

心の中には、かく慰めがたき形見にも、げにさてこそ、かやうにもあつかひきこゆべかりけれと、悔しきことやうやうまさりゆけど、今はかひなきものゆゑ、常にかうのみ思はば、あるまじき心もこそ出でくれ、誰がためにもあぢきなくをこがましからむと思ひ離る。（早蕨⑤三五一頁）

薫は、大君の言葉通りに自分が中の君を引き取ればよかったと、今更ながらに後悔する。こうした薫の後悔は、幾度となく物語のなかで語られている。

だが薫は直接中の君にその恋慕を伝えることをしない。その代わり、薫は中の君に大君への思慕を語る。神田龍身は、大君への誠実な思いを中の君に語りかけるのは、「中の君の同情をかい、彼女を口説くための便法だった」と言う[13]。薫の語る大君への思慕が全くの建前でしかなかったとは考えがたいが、それにしても中の君への恋情を隠して大君への思慕だけを語る薫の姿からは、中の君に接近するために大君への思慕を方便として利用する側面も少なからずあったと考えられる。まさか自分に恋情を抱いているとも知らず、薫が大君だけを思い続けていると完全に信じ切った中の君は、薫の思惑通り、徐々に薫との心的距離を縮めていく。そして心だけでなく物理的な距離までも縮める。こうした中の君の行動は、薫の中の君への欲望をひたすらに駆り立てていく。いよいよ辛抱ならなくなった薫は、ついに中の君その人の袖を掴むのである。

中の君が「かたみにいとあはれと思ひかはしたまふ」ことのできる存在として見ていた薫は、その実、中の君とは全く異なる思いを抱いていた。薫をすっかり信頼しきっていただけに、中の君は一通りでなく失望する。

なかなか、むげに心知らざらん人よりも恥づかしく心づきなくて、泣きたまひぬるを、「こはなぞ。あな若々し」とは言ひながら、言ひ知らずらうたげに心苦しきものから、用意深く恥づかしげなるけはひなどの、見しほどよりもこよなくねびまさりたまひにけるなどを見るに、心からよそ人にしなして、かくやすからずものを思ふことと、悔しきにも、また、げに音は泣かれけり。（宿木⑤四二八頁）

中の君は、唯一心を寄り添わせることのできる存在として薫を捉えていたからこそ、薫の心外な行動に、なまじ気心もしれない人よりもきまり悪く感じて、泣き出してしまう。その中の君の様子に一層恋情を募らせる薫は、相変わらず匂宮に中の君を譲ったことを後悔して、中の君とともに泣き出す。同じ時、同じ場所で涙を流す二人の男女は、はたから見れば「かたみにいとあはれと思ひかはしたまふ」姿に見えるかもしれない。だが、それぞれの涙の内実は対照的なものであった。一方は心から信頼していた男が自分にあらぬ思いを抱いていたことの悲しさ、もう一方は恋しい女が自分のものにならないことへの悔しさ。こうした双方の涙の性質の落差が、皮肉なまでに中の君の絶望を鮮やかに浮かびあがらせる。

八　おわりに

中の君が薫に宇治帰郷を訴えるのは、なんとしても宇治帰郷を果たしたいからではない。薫をもってしても宇治行きが実現困難なことは、中の君にとっても自明のことであった。中の君は周囲の人々に、自分が匂宮との結婚生活に苦悩していることを決して見せまいと努めていたが、薫のことは唯一心を許すことのできる存在として認識していた。中の君は露骨な不満の吐露にならないよう、宇治帰郷願望をわざわざ口実を設けながら訴えかけるという回りくどい方法をとることで、自らの苦悩を察してもらいたいという欲望を満たしていたのである。だが、そうした思いとは裏腹に薫が自分に恋情を募らせていたことに気づいた中の君は、いよいよ心の拠り所を失うのであった。

何かは、心隔てたるさまにも見えたてまつらじ、山里にと思ひ立つにも、頼もし人に思ふ人も疎ましき心そひたまへりけり、と見たまふに、世の中いとところせく思ひなられて、なほいとうき身なりけりと、ただ、消えせぬほどはあるにまかせておいらかならんと思ひはてて、いとらうたげに、うつくしきさまにもてなしてゐたまへれば、……（宿木⑤四三三頁）

薫が下心をもっていたことで人生をすっかり諦めた中の君は、成り行きに任せて穏やかに生きていこうと決意する。だが、その諦観を宇治行きの活路が閉ざされたことによるものだと単純に解したくはない。これまでに述べた通り、宇治帰郷は、仮に薫が中の君に対して恋情を抱いていなかったとしても、最初から実現困難なものであり、中の君にとっては実現を目指すものではなかった。それでも、心を許して宇治行きという幻想を吐露し、甘えることのできる唯一の存在であった薫が「疎ましき心」をもっていたことで、心に完全なる孤独を抱えることとなり、中の君は人生を諦観するのである。本心から甘えることができる相手を失った中の君は、匂宮に賢く甘えるふるまいを見せることに徹する道を選び、苦悩と孤独を誰にも理解されることのないまま、「幸ひ人」[14]としての人生を歩むこととなるのであった。

※『源氏物語』の本文は、小学館『新編日本古典文学全集』に拠り、それぞれ巻名、巻数、頁数を付した。

注

（1）二〇一七年度中古文学会春季大会（於東京女子大学）での口頭発表。近く論文としてまとめる予定である。

（2）原岡文子「中の君」（秋山虔編『別冊國文學　源氏物語必携Ⅱ』学燈社　一九八二年二月）、同「幸い人中の君」（『源氏物語の人物と表現　その両義的展開』翰林書房　二〇〇三年。初出一九八三年・一九九二年）は、語り手が中の君との間に距離を置き、批判的に中の君の苦悩を語っていることを指摘する。また三田村雅子「〈音〉を聞く人々――宇治十帖の方法――」（『源氏物語　感覚の論理』有精堂　一九九六年。初出一九八六年）は、「客観的に比べれば比較にならないはずの都の風のなごやかさの中に、ひたすら荒涼を聞きとるその中君の姿勢に、聞くという行為の恣意性を浮きあがらせて、物語は、宇治十帖で特に強調された認識としての〈音〉の用法を滑稽なまでに対象化し、相対化してみせる」と論じる。

（3）石阪晶子「「思ふ」女の未来学――中の君物語における思惟」（『源氏物語における思惟と身体』翰林書房　二〇〇四年）では、中の君の思惟が、なんの進展も見せずにただ繰り返されるだけであることを指摘し、「「思ひ」を重ねることで逆に現実の状況への観察から逃げている」と論じる。宇治帰郷願望もこうした思惟の産物であることから考えると、現実を見据えたうえでの願望ではないといえるだろう。

（4）拙稿「葵巻の光源氏と六条御息所――「ことつく」の織りなす関係性」（『立教大学日本文学』一一五号　二〇一六年一月）、「『源氏物語』における規範の諸相――「ことつく」をめぐって――」（『物語研究』一六号　二〇一六年三月）、「ことつく攷――『源氏物語』と『夜の寝覚』」（源氏物語を読む会編『源氏物語〈読み〉の交響Ⅲ』新典社　二〇二〇年）

（5）この部分については、出典未詳歌である「世やはうき人やはつらきあまのかるもにすむ虫のわれからぞうき」を引歌とし、虫の「われから」に「我から」の意味を掛けて、自らの身のつたなさを憂いているように思わせながら宇治行きを訴えかけているのだというのが古注以来の通説となっている。

（6）例えば、光源氏の琴を聴きに里帰りしたい明石女御は、今上帝の許しを乞うため、「神事などにことつけて」（若菜下④一八二頁）と、妊娠ゆえの神事への穢れを口実にする。

（7）工藤進思郎「『源氏物語』宇治十帖の中君についての試論」（『文学・語学』第五五号　一九七〇年三月）。この論を再考したものに、同「宇治の中君再論――独自の生とその位置づけをめぐって――」（森一郎編『源氏物語作中人物論集』勉誠社　一九九三年）がある。

（8）山上義実「『源氏物語』宇治十帖における中の君をめぐって」（東北大学文学部国文研究室編『北住敏夫教授退官記念　日本文芸論叢』笠間書院　一九七六年）

（9）斉藤昭子「中の君物語の〈ふり〉――宇治十帖の〈性〉」（物語研究会編『新物語研究4　源氏物語を〈読む〉』若草書房　一九九六年）。この論を再考したものに、同「宇治の姉妹の「母なるもの」とメランコリー――中の君物語の「ふり」・再説――」（室伏信助監修・上原作和編『人物で読む源氏物語　大君・中の君』勉誠出版　二〇〇六年）がある。

（10）井野葉子「中の君　評価のまなざし」（『源氏物語　宇治の言の葉』森話社　二〇一一年。初出一九九四年）

（11）鈴木貴子「宇治中の君の涙」（『涙から読み解く源氏物語』笠間書院　二〇一一年。初出二〇〇四年）

（12）篠原昭二「大君の周辺――源氏物語女房論――」（『国語と国文学』四二巻九号　一九六五年九月）、注2で挙げた原岡論文。

（13）神田龍身「さかしまの主人公――浮舟の登場」（『源氏物語＝性の迷宮へ』講談社　二〇〇一年）

（14）注2で挙げた原岡論文。

（ふきや　ゆうき　本学大学院博士後期課程）